

## 国費学部留学生に対する1年の集中予備教育プログラムについて － 教育プログラム内外で学生の得るもの－

鈴木美加(東京外国語大学留学生日本語教育センター)

### 1. 学習者の特徴と条件

東京外国語大学留学生日本語教育センター(以下本センター)では、世界各国から来日した文科省国費学部留学生(以下学部留学生:2004年現在)に対し、来日直後の1年間の教育を実施している。2004年度現在、本センターには71名の学部留学生が在籍しており、全45カ国<sup>1</sup>(アジア、ヨーロッパ、中南米、アフリカ、オセアニア)からの学生を受け入れている。また、学生の専攻分野も多岐に渡り、2003年度修了生の専攻は、情報工学、電子工学、生物工学、医学、薬学、獣医学、土木工学、経済学、経営学、国際関係学、会計学、法学、政治学、教育学、日本語学、文学、ビジュアルデザインなどである。

国費留学生の選考にあたっては、各国で選考試験が行われる。文科系、理科系各々の科目の試験結果に基づいて、合格者が決められる。選考の際には、日本語学習は必要とされておらず、8-9割の者が日本語は全く未習かそれに近いレベルである。合格者は、文科省国費学部留学生として、1年間の東京外国語大学又は大阪外国語大学での集中予備教育とその翌年からの4年間の国立大学学部<sup>2</sup>での教育を受けることになる。全くの日本語ゼロで来日した学生も、1年後は国立大学の学部1年生として、日本人学生と同じクラスで日本語での講義を聞き、単位を取っていかなければならない。

### 2 1年集中教育プログラムの目標

1年を通じての本プログラムの目標は、「大学学部入学後に日本語による講義を聞き、必要な課題をこなし、単位を取っていくことができる力をつける」ことである。この力とは、種々の能力により構成されるが、大学で必要とされる日本語の基礎となる知識とコミュニケーションのためにそれらの知識を四技能において使える能力、専攻分野や一般常識等の基本的な知識と物事を多面的に捉えられる思考力と好奇心、自ら人間関係を作り出せるだけのコミュニケーション能力、時間の管理や危機回避などのための自己をコントロールする力など、複雑な力が総合されたものとする。

### 3 本プログラムにおける各科目の授業の目標及び内容、評価

本プログラムの授業科目はすべて必修である。授業科目は、全学生対象の共通科目と、文理及び専攻別に必修科目が設定されている。理科系学部留学生に対しては「日本語」、「数学」、「化学」、「物理」または「生物」、「多文化コミュニケーション」、「英語」の履修を必修とし、文科系学部留学生に対しては、「日本語」、「政治経済」、「数学」または「日本史」、「日本事情」、「多文化コミュニケーション」、「英語<sup>3</sup>」の履修が必修である。

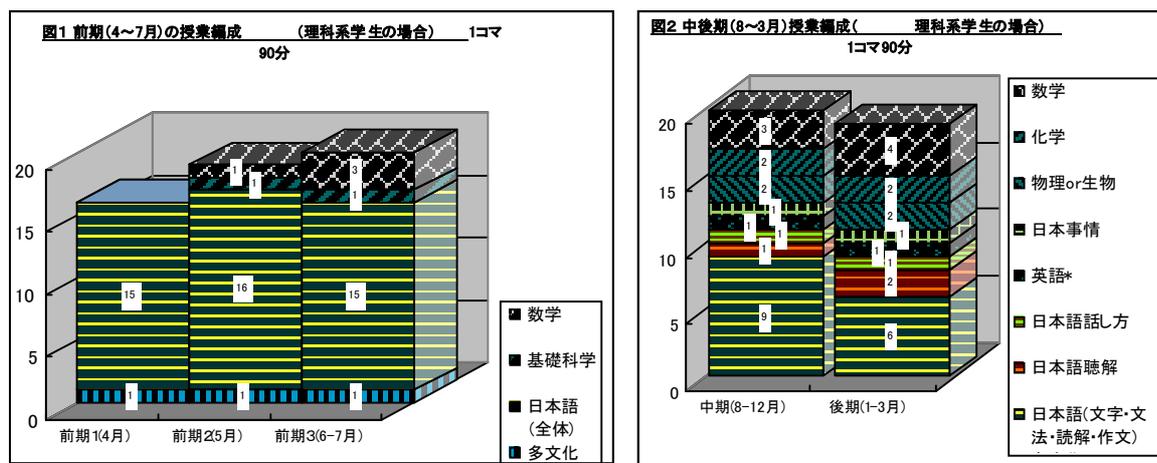
<sup>1</sup> 今年度の学生数が多い国順に挙げると、ベトナム12、ルーマニア6、インドネシア4、ハンガリー4、カンボジア3、モンゴル3、オーストラリア3、ブルガリア3、モロッコ3、タイ2、ネパール2、イラン2、インド(以下1)、スリランカ、大韓民国、バングラデシュ、フィリピン、ブルネイ、マレーシア、ラオス、フィジー、トンガ、コロンビア、チリ、ニカラグア、ブラジル、ペルー、ホンジュラス、メキシコ、カザフスタン、セルビア・モンテネグロ、フランス、ラトビア、ロシア、セネガル、タンザニアとなっている。

<sup>2</sup> 国費学部留学生は原則としてすべて国立大学に入学することとなっているが、本センターの学生については、2002年度からごく一部の私立大学に入学することとなった者もいる。

<sup>3</sup> 英語については基準を満たさない者のみの受講となり、受講学生は4名前後の年度が多い。

授業期間は、1年を3つの学期に分け<sup>4</sup>、前期約 14 週、中期約 16 週、後期約 8.5 週としている。初めは日本語の授業時間を多くし、学期が進むとともに専門基礎科目の時間数が多くなるような時間割にしている。これは、学習者の認知的な負担を重くしすぎない、専門基礎科目は日本語による講義が基本となるため、学生の日本語レベルがある程度進んでからの開始が適当である、という意図による時間割編成である。図1と図2に理科系学生を例とした週あたり授業時間数、資料2に学期別時間割を挙げる。

授業の目標及び内容に関しては、各科目で設定されている。これまでに、全体としては各科目である程度内容が定まっており、必要に応じて若干の変更をするという方法がとられている。表1に、各科目授業内容を月ごとに示す。



以下に、まず日本語科目の概要について述べ、その後で、そのほかの科目について紹介する。

### 3-1 日本語科目での目標及び授業内容、評価<文理共通;前期～後期>

年間の日本語科目全体の言語面での目標として、以下の2点が挙げられる。

- 1) 大学学部において日本人学生とともに日本語での講義を聞き、必要な文献を読み、発表や議論をし、レポートを書くことができるようになる。
- 2) 上記の目標達成に必要な言語要素(文字表記、文法、語彙)を習得し、実際にコミュニケーションの際に適切に使用できる。

上記の年間の目標達成のための、日本語の各要素、技能の目標を以下に挙げる。

- a) 語彙: 初級から上級までの約 5,500～6,000 の語彙の意味と使い方を理解し、覚え、四技能で

<sup>4</sup> 2004年度は、大学内の他部局との連携を考慮し2学期制としたが、本プログラムは授業週数を多くせざるを得ず、教務的に無理が生じている。以下は、教務的に移転の影響を受けなかった2002年度のスケジュールに基づいて述べる。



の運用ができる<sup>5</sup>。

- b) 文字: 日本語で使用される平仮名と片仮名計 142 字と、漢字約 1,580 字(初級漢字約 600 字、中級漢字約 620 字、上級漢字とする約 360 字)の読み方と書き方を覚え、運用ができる。
- c) 文法(文型): 初級から上級までの約 530 項目を中心とし、文法を理解し、覚え、四技能での運用ができる。
- d) 聴解能力: ニュースやアナウンス、講義等を聞き、必要な情報を得ることができる。全体として視聴内容の理解ができる。
- e) 口頭表現能力: 日本語のスピーチや、日本人を交えたディスカッションで自分の意見がわかりやすく述べられる。適切に質疑応答ができる。
- f) 読解能力: 新聞や一般教養レベルの本を読んで、必要な情報を得ることができる。文章全体の内容の意味構築ができる。
- g) 文章表現能力: 小論文によって自分の意見が論理的に述べられる。また、相手にわかるように説明文が書ける。

日本語授業の毎月の内容は、表1に挙げたとおりである。初、中、上級の各段階は、各々前期、中期、後期に対応している。各段階での目標を以下に挙げる。

#### 初級(前期 約 14 週<sup>6</sup>)

- ・初級レベルの言語要素である文法、語彙、文字について理解、記憶し、四技能で使用するようになる。
- ・日常生活に必要とされる基本的な会話の聞き取り及び口頭表現ができ、まとまったやさしい文章の理解ができ(2,000 字程度)、ごく身近なトピックについて 600 字以上の文章が書ける。

#### 中級(中期 約 16 週)

- ・中級レベルの言語要素(文法、語彙、文字)を理解、記憶し、四技能で使うことができる。
- ・身近なテーマに関する説明や意見を相手にわかりやすく書いたり、話したりできるようになる。
- ・必要に応じて語彙や文型がコントロールされた、文章の読解及びニュースなどの聞き取りができるようになる。

#### 上級(後期 約 8.5 週)

- ・上級レベルの言語要素を学習し、社会的な問題等に関する説明や意見を相手にわかるように書いたり、話したりできるようになる。
- ・新聞や一般書等を読んだり、ニュースやアナウンス、講義を聞いたりして、必要な情報が得られるようになる。

## **B.日本語科目の内容**

日本語科目では、本センターで作成した教材<sup>7</sup>とその他試作教材、市販教材等を使用して、以下を主な教育の内容としている。

<sup>5</sup> 初級語彙約 2,000、中級語彙約 2,400、上級語彙の中の一部約 1,100～1,600 である。

<sup>6</sup> 年度のスケジュールにより若干変更する場合もある。

<sup>7</sup> 『初級日本語』、『中級日本語』、『上級日本語』の主テキストと付属教材、聴解用ビデオ教材など。

語彙・文法・文字:初・中級の使用教材の中に出てくる言語要素全てと上級主教材の学習課の  
全言語要素

聴解:ビデオ教材や音声テープ教材による正確な情報取り、内容把握、ノート取りの練習

読解:レベルに合わせた文章を教材とし正確な内容把握、情報取りの練習

口頭表現:簡単な質問と応答、機能会話、スピーチ、ディスカッション、インタビュー

文章表現:日記、説明文、意見文、小論文等の作成上の注意点の理解とそれらの文章を書く練習

上の5項目のうちの要素としての語彙、文法、文字は四技能を伸ばす上で必須のものであり、要素の習得と技能の養成を連動させながら行うこととしている。

## C.日本語科目の運営

### 1)授業時間とクラス

週5日の授業日の中で、毎日平均初級3コマ(1コマ90分)、中級2〜3コマ、上級2コマの「日本語」の授業が行われる。メインとなるクラスは学生の国籍や専攻、男女が偏らないよう、1クラス8〜9名を標準として編成される。既習・未習、日本語習得適性テストの結果を参考にされ、クラス間で若干の人数の差がある。メインのクラスは文法、文字、語彙の導入と精読、作文を主に担当する。中級からは聴解や口頭表現、読解のクラスが別立てで設定される。

### 2)文型導入方法及び学習言語要素

初級文法導入は直接法を基本としている。これは、文脈の中から語彙の意味の類推、文法発見をする経験を持つことにより、学習内容を記憶、応用しやすくなるという意図から行っている。また、易しい項目から難しい項目へと進める螺旋型カリキュラムとなっている。直接法が適さないと予想された学生については、別クラスを設定し、演繹的に文法規則を理解してから、実際に使用する機会を多くする授業を実施している。

初級、中級学習期の言語要素(文字、語彙、文法)の習得に関しては、1日平均文字11〜16字、語彙41語、文型4〜6を学習しており、授業ではそれらの導入と練習をし、学生が記憶したり応用したりするための活動を行っている。文法、文字(漢字)の学習では理解をチェックしたり、運用を図るための課題が毎日配布され、その後教師が回収、添削、学生へのフィードバック、必要に応じた個別指導を行っている。

### 3)技能を伸ばす授業活動

学習した言語要素をもとに、その時点での学習者の言語知識レベルに応じた活動を四技能について各週ごとに計画を立て、実施している。さまざまな活動には、細かい情報をつかんだり、個々の情報を結びつけた処理を促す活動から、言語的な指標から全体を予測しながら読んだり、聞いたりする練習なども行っている。また、産出活動としては、接続詞などをうまく使って文章の流れを作りながら、客観的な説明をしたり、根拠と共に意見を述べるという活動を口頭、あるいは文章で表現する活動もしている。

### 4)上級での専門と関連した授業活動

大学での学習を間近に控えた上級期において、メインテキストによる要素の学習や内容理解を行うのと同時に、さまざまな社会的な問題に関するディスカッション、講義聞き取り練習などを行っている。その他に専門に応じた活動の例として、以下のものが挙げられる。

- ・ 理系聴解(科学的な内容のビデオを視聴し、メモを取る練習)(1996-97年度)
- ・ 文系読解(経済学、社会学などの新書レベルの文章を読む練習)(1996-97年度)
- ・ 専門に関する用語リスト作成(1993年度)
- ・ 専門に関する書籍、新聞を読む(1999-2001年度;一部クラスで実施)
- ・ 専門と関連する機関への訪問、見学、インタビュー(1999-2001年度;一部クラスで実施)

#### D.日本語科目での評価

日本語科目の試験については、学習項目がどの程度定着したか、技能面でどの程度目標に到達したかを測るものとしている。本プログラムで定期試験は、前期中間・期末試験、中期中間・期末試験、後期修了試験と全5回あり、文字、文法、聴解、読解、口頭表現、文章表現の試験もその時期に実施している。日本語の各科目の特徴、学期の目標によって、授業への参加度や課題提出点を評価に含める科目もある。試験時間は各科目 60～90 分であるが、口頭表現の試験は面接形式で、一人 5～8 分程度である。

#### E.学生は日本語科目で何を得ているか？

日本語科目によって、各学生は初級から上級までの膨大な言語知識を、その使われる状況と共に正しく把握し、四技能で活用できる力をつけている。その際、それ以外にも同時に養われている力があると考えられる。例えば、まず言語面では、文型や語彙の学習において、多くの例文や状況から推論し、その文型や語彙の意味や使い方を理解し、覚えるという、データ収集及び処理という一連の流れをスムーズに進める能力である。また、メインクラスや口頭表現のクラスなどでの意見交換やディスカッション、文章表現での小論文作成等での添削過程、スピーチ指導などで、自分以外の学生や教師の視点に気づき、論点のまとめ方や述べ方について理解する力も養っていると言えるであろう。さらに、情意面で、メインクラスが一つの共同体的なグループであるため、クラス内の円滑な人間関係やちょっとしたやりとりが学生の日本語学習、日本での勉学や生活の動機づけにもつながると言える。

### 3-2 そのほかの科目での授業目標と内容

どの学期においても、学生は日本語科目だけでなく、ほかの科目を並行して受講することが必要とされている。以下に日本語以外の科目の目標に関して、2001～2004年度の『センター活動記録』及び『履修案内』をもとに紹介する。授業の内容等、詳しくは表1及び上記の資料を参考にしていきたい。＜ ＞内の学期は、開講している学期である。

#### 3-2-1. 文理共通必修科目

##### A. 多文化コミュニケーション＜前期＞

- ・ 一般に留学生が経験する日本人との異文化接触に加え、数十の国・地域からの学生で構成される多文化社会で1年間の団体生活を送り、翌年度大学学部に入る学生が、異文化接触到に起因する心理的諸問題の予防、解決をし、異文化と有意義な関係を構築できる能力を持つようになる。

##### B. 英語＜中期～後期＞(英語のレベルが基準に満たなかった学生必修)

- ・基礎的文法力を付ける。日本の中学や高校で学習する文法事項の習得を目指す。

### 3-2-2. 理科系必修科目

#### A. 数学<前期2期～後期>

- ・日本語による数学が理解できる。
- ・基本的計算力をつける。
- ・数学の考え方が理解できる。

#### B. 基礎科学:<前期2期～前期3期>

- ・実験を通じ、科学の基本的な事項を理解し、あわせて化学実験の基本操作・基本測定と態度を習得すると同時に、科学用語を理解する。

#### C. 化学<中期～後期>

- ・実験を通して自然や物質に対する認識を深め、科学的思考力や態度を養成し、各分野で対応し得る基礎を体験する。
- ・自然現象をよりよく理解するために、化学で用いられる方法・考え方を習得し、同時に基本的な事項を理解する。

#### D. 物理学<中期～後期>(医学・薬学・生物学関連以外の分野専攻の理系学生必修)

- ・複雑な自然現象を正しく理解するために、物理的な思考力を養成する。
- ・実験や体験を通して、実験と理論との関係を物理的科学的に考察する方法を習得する。
- ・物理の基礎である力学と電磁気学を中心に基礎的な考え方を理解し、他の分野への応用力を養う。

#### E. 生物<中期～後期>(医学・薬学・生物学関連専攻の学生必修)

- ・日本語による生物学の基本的用語、概念を学びつつ、生命現象への関心を深める。また、日本の動植物に対する理解の手がかりをつかむ。

### 3-2-3. 文科系必修科目

#### A. 政治経済<文科系;前期2期～後期>

- ・日本の社会文化を理解・研究していく上で不可欠な事実・問題の学習を通じて、社会科学的分析の基本概念の理解と科学的思考方法の育成を目指す。
- ・比較論的アプローチによる異文化理解の促進を心がける。

#### B. 日本史<文科系;前期2期～後期>(経済学・経営学以外の専攻の学生対象)

- ・日本の歴史的形成と現代世界について、細かい事実関係に重点を置かず、大筋の流れを理解する。
- ・国内的要因と世界史(アジア史)的視点との関連性に注目して論ずるばかりでなく、現代の日々変わる政治経済状況と国際関係に絶えず留意する。
- ・最新の新聞記事などを使って、歴史的見方や分析力、現代社会と歴史との関連性を見る眼を養う。

#### C. 数学<文科系;前期2期～後期>(主に経済学・経営学専攻の学生対象)

- ・大学で必須科目となる微分積分学と線形代数学を学ぶのに支障のない学力をつける。

#### D. 国際関係論<文科系;後期>

- ・日本を取り巻く国際環境と関係について、特に近代以降の基礎的事項と歴史的形成を中心

に理解する。また、日々変化する国際情勢についても検討する。

### 3-2-4 専門科目の評価

専門科目の評価も、主には定期試験によって測られている。科目の特徴や目標、学期、教師の意図等から、定期試験ではなく、レポート提出や発表などが評価の対象となる科目もあり、またその複数の評価対象の結果に基づき、成績が算定される科目もある。

### 3-2-5 学生は専門科目によって何を得ているか？

どの専門科目も、学生の日本語レベルを考慮しながら、実施されてきている。授業の内容は、大学入学後日本人大学生と勉強するからと、関連分野の日本人が習った事柄を網羅するというのではなく、基本的な最も重要な用語<sup>8</sup>が選定され、それらの用語の学習をすると共に、大学で必要とされる基礎的な内容を取り上げ、その内容をトピックとして、講義、実験、証明、ディスカッション等を進める形式で、授業が行われている。それにより、学生は、国ですでに学習している場合は専門として重要な用語の日本語の言葉を概念とともに覚えること、国で学習して来なかった場合には、日本語の言葉と共に概念を理解し、覚え、それ以後の生活及び学習の中で利用できる力を養っている。と同時に社会事象や自然現象、数学の理論などに対する認識を深化させ、多面的な物の見方ができるような機会を得ている。

専門科目の中で、多文化コミュニケーション科目は、他の科目と性質が異なり、学生が自分の置かれた状況を肯定的に捉え、自分の文化及び他の学生の文化、日本の文化を理解する機会を得、文化の発信者となる力を育てていると思われる。

## 3-3 教育システム及び環境から学生が得ているもの

各科目での授業以外に、教育システムや生活環境から学生が得ていると思われる事柄の例を以下に挙げる。

### A.日本の大学(あるいは本センター)での授業の受け方に関する理解

各学生の教育背景により、授業の受け方が異なる。例えば、本プログラムでは、授業は20%以上欠席しないこと、授業中にガムをかんではいけないこと、課題は締切に間に合うように提出すること等、日本の大学あるいは本センターでの「ルール」や「常識」、「マナー」とは相容れない環境で教育を受けてきた学習者もわずかとは言えない。学習者が日本での大学生活を円滑に送ることも視野におきながら、学習者が自らの行動及び態度を意識化し、行動形成をする場となっている<sup>9</sup>。

### B.授業中での情報の獲得とそれに対する向き合い方の理解

学生は、聴解や読解の教材の中の情報を理解したり、教師やクラスメートとの会話の中からさまざまな情報を得ている。また、それらの情報に対するディスカッションをしたり、教師または他の学生の反応に触れる中で、学生自身がどのようにそれらの情報に向き合ったらいいかを考え、対応していく経験を積んでいる。

<sup>8</sup>大学で学ぶ際の使用言語について1万語の語彙習得が必要とされ、本センターでも、専門基礎科目等の語彙を合わせると、それに近い数字になるとと思われる。

<sup>9</sup>本センターでは、各期ごとにオリエンテーションを実施し、カリキュラムや授業での注意事項を知らせている。また、各授業については各科目担当教師が対応している。

日本での情報リテラシーの能力を一部養っていると言える。

### C. 困難を乗り越える経験

日本語、専門基礎科目ともに試験を実施しており、その成績が、各学生の進学大学決定、あるいは本センター課程の修了判定の重要な資料となる。そのため、すべての学生はすべての科目の試験のために、勉強に集中することが必要とされ、量的にも時間的にも精神的にもハードな1年間を過ごさなければならない。試験等に関し、肯定的に捉えられない場合もあると思われるが、学生自らに課された苦しい状況における問題解決という課題に取り組んだという経験が、大学での大変な時期を何とか乗り切る方法を提供するとも言える。

### D. 知識や技能面での向上とクラス内の関係作りによる自信や意欲

授業のスピード、学習項目の量の面でかなりの負担を抱えながら、学習を継続するためには、学習者自身が学習を肯定的に捉えられることが必要である。言語面での達成により学習者が自信を持ち、満足感を得ることにより、その後の学習への動機づけが高まる。また、クラス内の教師やクラスメートとの相互のやりとりによる笑いや意見の相違とその対処など、日々の授業活動が学習意欲の継続につながり、大学での学習への精神的な面での準備となっているとも言えそうである<sup>10</sup>。

## 4 教育面以外で学生が得ているもの

### 4-1 寮での生活を通して

本センターの学部留学生は、全員キャンパス内の寮に住むことが決められている。寮の中での学生同士のコミュニケーションにより、お互いをよく知り、それぞれの学生の長所も短所も認め合い、その中で暮らしていく体験をする。授業では得られない学生同士のさまざまな経験の共有や、問題解決の経験を経ながら、他者・自己を深く理解し、精神的に学生自身が強くなり、大学での生活への心理的な準備をしていると考えることができる。

## 5. 大学学部での授業から見た本プログラム

### A. 日本語の言語要素と技能

1年間、正味 10 カ月の授業期間であり、言語要素、特に語彙数がまだ十分ではない。不足分については、学部入学後、主に学生自らが辞書を使用して自分で獲得したり、まわりに助けってもらったりして補う対処法をとっていると思われる。また、技能面でも、言語面の不足に影響を受け、まだ十分なレベルとは言えない。まわりの助力を求めたりしながら、自力で単位をとっていくための基本的な技能の習得がなされていると思われる。

### B. 専門等の科目履修の面で

本センター修了時に、1年間のプログラムを無事終えたと認められる者は、大学学部での勉学を乗り越えられる者がほとんどである<sup>11</sup>。1年次に講義を聞くのが大変難しいと感じても、2年、3年では問題が少なくな

<sup>10</sup> 学習面あるいは人間関係、健康等の面で、かなりの問題を抱えている場合、不適応や体調不良等学習を継続できない事態に至るケースもある。

<sup>11</sup> 1970年度からのすべての本センター修了生のうち、9割が学部を卒業し、4割が大学院に進学している(東京外国語大学留学生日本語教育センター1995)。

ってくると修了生の多くが述べている。中には、4年後に無試験で大学院に入学できるような、優秀な成績で卒業する学生も珍しくない。

また、本センターで学習面で不安を残して修了した者でも、4年で卒業し、大学院に進学し、修了あるいは学位取得する者もいる。継続的な学習面での努力をしつつ、まわりの人との人間関係をうまく作り、学習面での不足を補う方法を本人が持ち得ている場合や、教師や他の学生から適切なアドバイスが得られやすい状況にある場合には、問題点の明確化とその解消がしやすく、スムーズな単位取得につながっている。学生が性格面や適応面での問題で、まわりの人間との信頼関係を築きにくいような場合、留学生活がうまく続けられないケースもある。

## 5 プログラムとしての工夫と今後の課題

### A. 自らの学習をコントロールできない学生に対する対応

本プログラムでは、毎日漢字 13 字、語彙約 40 語ずつ着実に覚えていくことや、その他の課題をこなし提出することといった、毎日の地道な積み重ねにより、学習が進んでいく。学習に問題のある学生は、1)授業中の集中力が 90 分続かない、2)授業後の自らの学習が不足しているまたは不十分な復習しかできていない、3)学習時間が不規則で翌日の授業を休むことがある、4)これまでに語学教育で集中的に多くの要素を記憶した経験を持たず、毎日の新出事項が記憶量の限界を超えているなど、学習のルーティーン化がされないといった問題がある。日本語習得に問題が見られる学生については、他の科目においても問題が見られることがある。

授業は 2004 年度現在、平日 9 時 00 分から 4 時半まで主に行われており、課外に文章表現等課題の個別指導、学習項目の定着に問題が見られる者に週 2 回各 1 時間の補講も実施している。それ以外に食事、睡眠の時間を除くと、6-7 時間程度の時間しか残らず、生活時間をコントロールする力が学生に求められる。これまで学習面で問題が見られ、集中教育の経験がない学生への対応として、担当教師からの学習時間、学習方法に関するアドバイスや個別指導も行っているが、現在も教育上の一つの課題となっている。

### B. 各科目での課題の量と学生の過重負担の解消

日本語科目では、言語要素習得のための課題や技能養成のための課題などが定期的に学生に与えられる。その他の科目においても、レポート提出などの課題が出されたり、小テストが実施されるが、複数の科目の課題が重なり、学生にとっては期日までに提出することが過重な負担となる場合もある。

これまで科目間で、課題提出時期やその内容に関する情報を交換することがあまり行われてこなかったが、2002 年度以降、課題と提出時期の情報や授業内容に関する情報交換を行うようにしている。まだ十分とは言えないが、今後さらに課題や小テスト実施などに関し、情報交換や話し合いをし、効果的で学生にとって無理のないプログラムにしたいと考える。

### C. 環境を利用した自発的学習につながる教育へ

日本での留学生のおかれた環境として、日本人と接する機会が意外に少ないということが挙げられる。大学において、日本人大学生の履修する授業と留学生の履修する授業が重ならないことが多いことから来るものと思われる。本センターが移転統合し、地理的には本センターの留学生も日本人学生との距離が近くなった。意識的に日本人学生と友人関係を作ろうと働きかけることができる学生には、友達が作りやすい環境になった。しかし、多忙なこともあり、積極的な働きかけができていない場合、授業以外では日本語を

全く使用しないこともあるようである。

移転後の住まいとしての国際交流会館の設備と構造は、従来と変わり、以前共同設備であった、キッチン、シャワー室、トイレも、各居室に設けられたことなどから、これまでの共同体的な雰囲気から、個々の学生の個人空間をメインにした造りへと変わった。その変化が学生同士のつながりにも影響を与え、現在は比較的小さいまとまりのグループ等での行動が見られる。

学生自身の授業以外での主体的な学習や精神的な成長を促すために、どのような支援ができるか、検討する必要があると思われる。

#### D. 効率化係数と本教育プログラム

今年度から国立大学は独立行政法人化され、本センターにおいても業務全てについて効率化係数をかけられ、財政面での縮小化によって業務の見直しが必要とされている。本プログラムにおいても例外ではない。1年という限られた期間の中で、1) 超集中教育であるがゆえに、すべての学生にかなりの認知的負担を課さざるを得ず、学習や文化理解を支援するための教育システム面及び教員側の対応が、質量の面で非常に重要であり、他の留学生教育とは全く性質が異なること、2) 学業に問題のある学生についても、できるかぎりの対応をきめ細かく行うことが、結果として無事学部卒業につながったと思われるケースも多く、落伍者をできる限り出さないよう、個々の学生の特性に応じた教育を行うことが必要とされていること、などの面で、安易な財政面での改変には、学生にいずれかの時期に負担を強いることになる可能性がある。どのような面で効率化できるのか、学生への影響を十分検討しながら、プログラムを「改善」して行きたいと考える。

#### <参考文献>

村上京子(2003)「留学生と日本語教育—学部留学生の実態と問題—」『留学交流』3月号 pp.6-9.

東京外国語大学留学生日本語教育センター(2004)『2004年度履修案内』

東京外国語大学留学生日本語教育センター(2004)『2003年度センター活動記録』

東京外国語大学留学生日本語教育センター(2003)『2003年度履修案内』

東京外国語大学留学生日本語教育センター(2003)『東京外国語大学留学生日本語教育センター2002年度活動記録』

東京外国語大学留学生日本語教育センター(2002)『2002年度履修案内』

東京外国語大学留学生日本語教育センター(2002)『東京外国語大学留学生日本語教育センター2001年度活動記録』

東京外国語大学留学生日本語教育センター(2002)『東京外国語大学留学生日本語教育センター2000年度活動記録』

東京外国語大学留学生日本語教育センター(1999)『国費学部留学生予備教育—その現状と課題』

東京外国語大学留学生日本語教育センター(1995)『1970年度～1993年度入学生を対象とする国費学部留学生に関する調査報告』

東京外国語大学留学生日本語教育センター(1992)『卒業生アンケート』(内部資料)

## 資料1 学期別時間割